

第5分科会〈ライトノベルとの対話〉ライトノベルは教材になるか



蝉川夏哉（せみかわなつや）

1983年大阪府生まれ。大阪市立大学文学部卒。会社勤めの傍ら、『邪神に転生したら配下の魔王軍がさっそく滅亡しそうなんだが、どうすればいいんだろうか』（アルファポリス）でデビュー。現在四巻まで刊行中。

◆そもそもライトノベルって、どんな本？

- ・ライトノベルは、日本のサブカルチャーの中で生まれた小説の分類分けの一つ。英単語の **Light** と **Novel** を組み合わせた和製英語。
 - ・表紙や挿絵にアニメ調のイラストを多用している若年層向けの小説。
 - ・中学生～高校生という主なターゲットにおいて読みやすく書かれた娯楽小説。
- 但しこれらはあくまでも一説で、出版社でも明確な定義は存在していない。

◆現代文は題材としてライトノベルを扱うことができるか？

- ・文部科学省の学習指導要領において現代文は「近代以降の優れた文章や作品を読解し鑑賞する能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで表現し読書することによって人生を豊かにする態度を育てる」を目的としている。
- 現代文の定義から言えばライトノベルを教材として扱うことは可能である。

◆中島敦「山月記」を例に考える。

- ・「山月記」の元となったのは唐代に成立した「人虎伝」
 - ・テーマの変遷と「本歌取り」
- 「人虎伝」では因果応報の要素を含んだ怪異譚であったものが、中島敦によって「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という「人間の心の在り方」の問題へと扱う問題の変更が行われている。

◆「山月記」をライトノベルに書き改めると？

- ・中島敦が行ったよりも大きな改変が必要になる。
 - ・対象読者である若い子に訴えかける為には、若い子の求める物語にする必要がある。
- 女性キャラクターの投入と、物語の構成の変更

◆ライトノベルを教材として扱うべきか？